

# ブレンドの「美」

——現代中国茶席設計——

劉 偉\*

## 要旨

近年、現代中国では茶芸の発展とともに茶席は現代茶芸を見せる形として、大規模な茶博会や茶会などで展示される。そして中国各地で茶席設計大会が行われている。本稿では近年流行している茶席設計をめぐり、青島の各茶芸培訓（教育）学校、茶博会や茶会の現場で展示された茶席を、特にその「美」の創造プロセスに注目して考察した。本稿により、現代茶席は茶芸師たちが現代人の美意識に合わせてブレンドした「美」であるとも言えること、茶席に取り入れられる要素から、現代人が求めている「美」は多様であり、「異質」の特徴が見られることを明らかにした。

キーワード：ブレンド、「美」、茶席設計、文化生産、創造

## はじめに

近年、現代中国では茶芸<sup>(1)</sup>の発展とともに茶席という言葉が使われるようになった。それは茶芸を表現するため客に見せる「場」として注目され

\* 愛知大学中国研究科博士課程大学院生、愛知大学国際問題研究所補助研究員である。本稿は愛知大学 ICCS 若手研究者研究助成の成果である。

(1) 本論文における茶芸とは、1970年代に台湾で定義され、1980年代から台湾から伝来され、大陸で発展された新たな概念を指している。そして、茶芸という概念は定義した時点で、台湾の民俗学者は日本茶道と区別するために作ったとされる（範增平 2003: 292）、「茶芸」という語としたのである。中国では、茶文化の発展とともに茶芸という概念が広い範囲で認識されるようになり、それとともに、「1999年に茶芸師は国家職業資格になった」のであり、本論文における茶席は、その茶芸師教育内容の一部である（劉偉 2022: 34-36）。

ている。特に、茶会やイベントで茶芸を演じる舞台として展示されている。そして、それは茶芸師資格試験の審査内容にもなりつつある。

本稿では、アメリカの文化社会学者 Richard A. Peterson の文化生産理論を用いて分析する。1970年代に Richard A. Peterson は文化生産という概念を定義し、「生産とは、創造、市場化、分配、展示、吸収、評価、消費のプロセスとみなせる」<sup>(2)</sup>と述べている。また、Richard A. Peterson, N. Anand らは文化生産のプロセスについて、「文化は実際にどのように生産され、その生産過程で誰と関わるのか。また、文化的象徴はどのようなプロセスで生産されるのか、文化生産は実際の生活においては、具体的にどのような影響を及ぼしているのか」<sup>(3)</sup>と提起する。さらに、羅鋼、王中忱は「文化は消費文化へと発展し、あらゆる文化は商品という形に生産、交換や消費され、一般的な商品と同様に利益を獲得するために大規模に作り出される。そして『異質』の社会システムの中で消費されるようになった」<sup>(4)</sup>と指摘する。

現代茶席では、飲茶雰囲気デザインを設計し、茶芸教育機関の宣伝や茶葉を販売するために茶席を設計する傾向が顕著である。そこで、本稿では Richard A. Peterson の文化生産理論等を踏まえて、現代中国における茶席設計のプロセスを考察する。特に、現代茶席設計に取り入れられる要素だけではなく、その設計者や設計の目的に注目し、民俗学の立場から茶席設計における「美」がどのような要素を含んでいるのかを分析する。なお、本稿では、筆者が2015～2019年の間に青島市で行ったフィールドワークによって得た第一次資料をもとに、先行文献を参照しながら論じる。

## 一、茶席とは

茶席の概念については、多くの学者がその定義を試みているが、沈学政も指摘するように、「現代中国では茶席はまだ統一された概念ではない」<sup>(5)</sup>。

---

(2) Richard A. Peterson [1976: 672]。

(3) Richard A. Peterson, N. Anand [2004: 311]。

(4) 羅鋼、王中忱 [2003: 18]。

(5) 沈学政 [2016: 21]、周新華主編。

また、喬木森は「近年の台湾では、「茶席」の語をよく使っているが、茶会をさしているものが多く……、現代茶文化において重要な位置を占めている」<sup>(6)</sup>とし、「茶席」は新たな言葉で、古いながらも新しいものでもある、それは歴史的な記録がなかったためであり、新しい概念として扱うことにする」<sup>(7)</sup>と述べる。丁以濤も、「茶席は、茶芸、茶文化と同様に、新しい言葉であり、新たな概念である」<sup>(8)</sup>とする。

上述のように、「中国古籍には「茶席」という二字が見つからないため、新しい語である」<sup>(9)</sup>という指摘がしばしば見られる。また張来陽は「席」という言葉から解釈し、「元々は草、葦、竹などの材料で作った「席」から派生し、座席という意味になった」<sup>(10)</sup>とする。

古代では「茶席」とよく似た語があった。例えば、明代では「茶席」よりさらに広い範囲を指す茶寮という語が記録されており、「明代文人が書齋の外に設けた「側室」を「茶寮」といい、あるいは「専室」を「茶寮」という」<sup>(11)</sup>とある。明代高濂の『山齋志』には、「可見書齋外另設の飲茶専室、則可称得上是名符其实际的「茶寮」（書齋の外に飲茶する場を設置する、それは実質的な「茶寮」とも言える）」とある。つまり、「側室」、「専室」には茶席という意味があり、飲茶空間のことであり、茶寮は飲茶をする場所として定義されている。それに対して、陳宗懋は「茶寮とは、①寺で品茶する小齋である。②品茶のために設けた小部屋、あるいは小屋である。③茶館である」<sup>(12)</sup>と解釈する。以上によれば、茶席、茶寮という空間は茶を飲用する場所といえるだろう。

さらに、蔡榮章は「茶席は、狭義には茶を淹れる席であり、広義には茶席のことである。それは茶席、茶室、茶屋ともいえる、いわば、茶席は茶道（茶芸）を表現する場所であり、必ず儀式化された場所を指す」<sup>(13)</sup>と解釈している。したがって、現代茶席という概念は飲茶のために設ける空間

(6) 喬木森 [2005: 5-7]。

(7) 喬木森 [2005: 5-7]。

(8) 静清和 [2015: 序]。

(9) 喬木森 [2005: 4]。

(10) 張来陽 [2018: 255]。

(11) 王国安 [2000: 28]。

(12) 陳宗懋 [2015: 572]。

(13) 蔡榮章 [2011: 5]。

ともいえるだろう。そして、茶芸を演じるために用意した空間でもあり、茶を淹れる場所でもあり、茶を飲む空間ともいえるのである。

ところで、先に茶芸文化が発展した台湾では、茶会と茶席は同じ意味である。周新華は、「茶席は茶文化空間の一つであり、それには独立した主題があり、茶文化を凝縮した飲茶の雰囲気を作り出す場所である」<sup>(14)</sup>と述べる。静清和は、「茶席とは人、茶、器、もの、境（雰囲気）を含む美しい空間である」<sup>(15)</sup>と言う。すなわち、茶席は現代茶芸にとって重要な表現する空間であり、茶を淹れることを演じる空間であり、優雅な飲茶方式を表現する空間でもある。池宗憲は「茶席の美学を通じて、現実の生活に影響するまで美を追求する」<sup>(16)</sup>と述べている。

茶席では、茶とともに茶道具を並べ、飲茶空間を作る。張来陽は「茶席は視覚、味覚などの感覚を与える」<sup>(17)</sup>と述べており、現代茶席は飲茶にふさわしい環境が創造された場所であるともいえる。筆者のインタビューによると、茶席は狭義の概念で使われるのが一般的であり、日本茶道のような独立した部屋ではなく、主に茶芸を演じるために設置されたテーブル（席）あるいはその空間を指している。童啓慶は「茶を淹れる場所であり、操作する場所であり、客の休憩のために用意された場所でもある」<sup>(18)</sup>とする。また周文棠も「茶席とは茶を淹れる場所であり、飲む場所であり、茶道の活動に必要な空間である。そして呈茶場所であり、賓客の座席を設置したり、組み合わせたりすることで、文人が優雅な気持ちになる場所でもある」<sup>(19)</sup>という。本稿では、茶席とは芸術的に飲茶するために設置された空間を指すとする。

近年、茶会やそれに関するイベントが増え、茶席の発展も著しくなった。鄭斌によると「茶席は茶芸から発展し、茶席は茶芸の表現形態のひとつとなった」<sup>(20)</sup>と述べている。茶席は茶を振る舞う舞台であり、茶人の世界観

---

(14) 周新華 [2016: 44]。

(15) 静清和 [2015: 26]。

(16) 池宗憲 [2010: 19]。

(17) 張来陽 [2018: 225]。

(18) 童啓慶 [2002: 37]。

(19) 周文棠 [2003: 199]。

(20) 鄭斌 [2019: 15]。

を表現できる、茶の美を集約した場所だともいえる。茶席は現代茶芸にとって不可欠な存在である。

前述のように、現段階では茶席には統一された概念がないが、筆者のフィールドワークによると飲茶をするために設けた空間であると言える。それは日本茶道の茶席より茶室に近い、そして現代中国における茶を淹れることと飲むことを同じテーブルで行うのが一般的であるため、茶席はそのテーブルを指すものとも言える。

## 二、茶席の構成要素

### (1) 「伝統」符号の取り合わせ

徐贛麗は「現代都市の文脈では、科学技術の発展や人間の移動により、人々の思想観念は大きく変化し、民俗にも新しい形が生み出されている。そして新たなコンテンツや機能が生まれてくるのである」<sup>(21)</sup>と指摘した。つまり現代茶席は「新民俗」とも言える。

茶席の構成要素について、潘成は「歴代茶書の中に茶道具の組み合わせや品茶環境などは当代茶席芸術の土壌である」<sup>(22)</sup>と指摘する。つまり、現代茶席は古代の茶書、絵、詩を参考にして道具を組み合わせることである。2019年7月23日に人在草木間茶店で張茶芸師にインタビューした内容によると、「時代劇に登場する場面を参考にしながら設計することがよくある」と語る。

現代茶席の構成要素のなかで、茶道具はとても重要である。黄韓丹は「茶席は茶と茶道具の二つの基本要素により構成される」<sup>(23)</sup>と指摘する。また潘城も「茶道具は茶席にとって不可欠な要素であり、それは茶席のスタイルを決定する重要な要素でもある」<sup>(24)</sup>と主張している。そして、茶道具を通じて人々に情報を伝えることができる媒介でもある。例えば、各時代の写しものや現在流行しているものなどを取り入れ、物語を演出することが

---

(21) 徐贛麗 [2021: 12]。

(22) 潘成 [2018: 20]。

(23) 黄韓丹 [2016: 160]、周新華主編。

(24) 潘城 [2016: 158]、周新華主編。

できる。

ここで、2018年に人気を博したTV時代劇で使われた執壺と呼ばれる陶器事例について考えてみたい。執壺は大衆の日常生活で重要な酒、茶の道具である。茶道具を選択する際、その茶席のコンセプトとなる時代が決められる。LJ茶芸師によると、「執壺という道具が出現したきっかけは『知否知否应是綠肥紅瘦』<sup>(25)</sup>というテレビ時代劇である。このドラマの中で、宋代女官の教育として茶、香、花の稽古をしている様子がしばしば登場する。そして茶を立てる際、建盞（天目茶碗）や執壺が使われたことをきっかけに、建盞や執壺が全国的に広がったという。現在、執壺は青磁と透明感があるガラス製のものが流行っている。緑茶を淹れる場合には、よく透明なガラスの執壺が使われる。それは緑茶を淹れる際、茶葉が湯の中で舞っている様子を見せることができ、茶葉は形、湯の色を強調する場合には透明な道具の方が都合がよい。

ところで、現代の中国茶は飲むだけではなく、五感で鑑賞するものであるとも言える。宍戸佳織は「中国茶を味わうのは、茶葉の外観を鑑賞することも重要なポイントであり、特に西湖竜井茶のように形の美しさを喧伝される茶では、西湖茶礼もまた茶葉の美しさを観客に味合わせるよう工夫されている」<sup>(26)</sup>と述べている。まず茶の味を楽しむ前に、茶葉（乾燥している）の外観を見て香を楽しんでから、湯をかけて茶が湯に舞う容姿や、茶の湯の色を鑑賞する。これらは中国茶の楽しみ方のひとつでもある。執壺や白磁の茶杯（湯呑み）を使うのはより茶の鑑賞性を高めるのである。言い換えれば、道具により茶葉や茶の湯の美しさを表現するかどうかと関わる。

王興虎は、「茶道具の取り合わせは、主に材質、造形、装飾と焼成の四つの方面から、淹れる茶の特性をめぐって総合的に考案する。また茶道具の機能性や美しさなども、効果を発揮する」<sup>(27)</sup>と指摘している。例えば、執壺は湯が出てくる時に流れる線が、細長い首のように細かく美しい。そ

---

(25) 2018年に放送された人気の時代ドラマであり、そのドラマの時代は宋代に設定している  
のである。

(26) 宍戸佳織 [2006: 53]。

(27) 王興虎 [2017: 45]。

の様子が茶芸師の動作を際立たせることになり、執壺が茶席に取り入れられるのである。

前述のように、透明な執壺は特に緑茶にふさわしく、緑茶茶葉の色や形をアピールできるからこそ、湯を入れる際に茶葉の美しさをより一層引き出すという機能性も備える。例えば、「西湖竜井茶は四絶之誉「色緑、香郁、味甘、形美」を特徴とし」<sup>(28)</sup>と評価されている。つまり、執壺を現代茶席に取り入れるのは、時代感をもたらすことより、茶葉自体の形を表現するためである。換言すれば、現在茶芸は茶葉を飲むことに留まらず、茶葉や、茶を淹れる行為を鑑賞することでもあり、そのために執壺という道具が使われるようになった。また茶葉販売店では、商品をアピールするため、新しく独創的な道具を選ぶことがある。

しかし、茶人あるいは茶葉愛好者は執壺という茶道具をあまり好まない。2019年8月WKQの茶室でインタビューした内容によれば、「道具の見た目だけを求める人間は茶が好きではない」と考えるので、「見た目より実用性がある道具が良い」と語った。2019年8月にWKQに行ったインタビューによると、「青島の茶人は緑茶よりプーアル茶のような茶葉をよく飲んでいる、保温機能が少ない道具はプーアル茶を淹れる際湯の温度が足りない」という。また2020年4月5日にWECHATでL茶人にインタビューによっても、「ただの美しさを求めるだけではない。茶を美味しく淹れることを重視しないといけない」と語る。

以上によつて、茶人は流行している道具より実用性を求めていることを明らかにした。現代茶人圏では、茶を飲むことだけではなく、茶葉をコレクションすることにも注目している。価値がある茶葉、あるいは将来に価値が上がる茶葉が好まれていることは現代茶人たちの共通認識である。使われる茶道具は、流行している道具より、骨董品の方が茶人に好まれる。つまり現代茶人にとって茶や道具はコレクションの対象のひとつである。これから茶芸師の追求するものを検討してみる。

茶芸師が美しい茶道具を求めるのは、他者に好まれる茶席を設計するためである。2020年4月WECHATでインタビューしたLJ茶芸師は「執壺

---

(28) 穴戸佳織 [2006: 53]。

が茶席に使われる理由は、流行している道具だからであり、その茶席は人気を得やすい」と言う。さらに、「そのドラマは大変人気があるから、そのドラマに登場する道具を取り入れたらきっと人気の茶席になる。劇中の道具は新たなものではなく、古代の書物や絵などを参考にして模造したものである。中国古典の美があるため、伝統的な要素を取り入れたら茶席に重みを出しやすい<sup>(29)</sup>と語る。

現代茶席では伝統的な符号を用い、あるいは伝統文化の要素と組み合わせさせて演出される。茶道具により現代人を驚嘆させる茶席を生み出すために、茶芸師は伝統や異質な要素を取り入れる。一般大衆にとってドラマに出る道具が「美」と認識されることから、現代茶席は人気ドラマに登場するような道具を使うと、大衆に受けいれやすくなる。2020年4月5日にWECHATでインタビューしたL茶芸師は「これはファッションも同様に、ドラマに出る服装を真似して服を買うのと同様の心理的な考え方だ」と語った。それは人々がドラマに出る道具に憧れを抱き、憧れている場面に茶席に取り入れることが茶席の設計で重要なポイントとなる。

また、茶席には茶菓子の盛り道具も並べられる。それもドラマに使われる道具を参考にしている。日本茶道のように古美術の道具を使うことは現代茶芸にとって難しい、その代わりに新たに作られた道具が使われている。また日本茶道のような「型」が完全にできていないため、現代茶席は茶芸師の修得や、また実践しながら新たな「型」を創造している、これらのことは現代茶席の特徴でもある。

## (2) 「外来」要素の取り入れ

茶席の構成要素には、もう一つの特徴が挙げられる、それは「外来」要素を取り入れていることである。茶は伝統文化とされてきたが、現代茶席では伝統的な符号だけではなく、多くの「外来」要素が取り入れられている。温曉菊は「茶席に使われる掛け軸は、ふさわしいものであれば、どこのものでもよい<sup>(30)</sup>とし、また「茶席に使われた花は中国式、日本式、西

---

(29) 宍戸佳織 [2006: 53]。

(30) 温曉菊 [2016: 216]、周新華主編。



洋式のいずれでもよい」<sup>(31)</sup>と述べる。すなわち、現代茶席の構成要素は、人の目を奪うことができれば、その由来を問わず、様々な要素が取り入れられる。建盞を取り入れたのも同様である。2019年の深圳茶博会で、千人点茶ギネス記録に挑戦した際に建盞が使われ、その建盞販売会社は茶博会現場で人気ドラマを放映し、それにより建盞は好評を博した。山東省茶芸会の趙先生は、建盞を使った点て方（淹れ方）を青島で教えようと考え、50個の建盞を用意して青島に持って来た。さらに趙先生が参加した千人点茶ギネス記録に挑戦した時の写真を、毎日自分のWECHATモーメンツにあげ、宋代の点茶という点て方として宣伝している。趙先生はその淹れた方を教え、青島における茶芸師先生という地位を確立した。

そして、趙先生は古文や古画を参考にして、深圳茶博会で購入した道具で自ら白茶を磨いて、青島に宋代点前を普及させている。さらに茶百戲<sup>(32)</sup>という点前まで広げている。2021年の青島国際茶博会では、「宋茶」<sup>(33)</sup>という点前を披露し、そこでの茶席は宋代の古書を参考にしながら、使われた道具の中には、日本茶道で使われる釜、柄杓、茶を点てる建盞、茶筌があり、三人の茶芸師は鮮やかな漢服<sup>(34)</sup>を着て茶を点てた。そして、白茶を粉末にし、一つ一つの動作を丁寧に演じる。2021年6月18日にWECHATでインタビューした参加者が「茶を淹れる点前だけを演じるのではなく、タイムマシーンに乗るように現代から離れて古代に戻るように演じた」と語った。さらに舞台がLEDを取り入れ、茶と関連する動画を放送し、茶芸を演じる際に茶と関連性がある詩を朗読することも同時に行われた。このように様々な現代手法や芸術性が高い表現方式を組み合わせ、宋代の飲茶雰囲気を作り出している。

宋代式茶席設計では、茶席は中国文化の要素に留まらず、外来要素も取り入れている。日本茶道が使われた釜や現代技術で復元した建盞や漢服な

(31) 温曉菊 [2016: 220]、周新華主編。

(32) 茶百戲とは「中国武夷山市非物質文化遺産に登録されている、章志峰が日本の茶道を参照して、中国宋代の茶葉の淹れ方を復元したのである。その淹れ方は粉末の茶を茶筌で点てて、点てた茶の泡の上に字や絵のような模様を描くことである」（楊瑞榮 2014: 88-89）。

(33) 中国宋代茶の淹れ方。

(34) 古代ではあまり使われることがなく、主に現在の漢服運動に参加している人々が信じ、想像している漢民族の服装の名称である（周星 2014: 110）。

どの要素を取り入れるのは、ブレンドの「美」と言っても過言ではない。さらに、漢服を着ている茶芸師は、伝統的な方法で茶葉を磨き、湯を沸かし、茶筥で茶を点てることを演じる。つまり、古いやり方で飲茶方式を儀式化するため、それらの所作により物質的なものから形式的な方向に転換していた。2021年6月17日に WECHAT でインタビュー内容した茶席の設計者は「今回は昔の淹れ方を復元するだけではなく、中国茶文化の多様性を示す」と語った。

そして、海外の茶道具を取り入れる際、茶杓のような茶道具だけではなく、技術の面も取り入れている。例えば、いけばなの技術により花をいけて茶席に並べることも現代茶席でよく利用する要素である。2022年3月15日に WECHAT でインタビューしたD茶芸師は「茶席に花を飾るのは中国宋代文人たちが好む要素であり、『四大雅事』の一つである」と主張した。しかしそのいけ方は日本華道のいけ方が多い。2022年3月15日に WECHAT でインタビューしたD茶芸師は「日本華道を習った経験を活かした」と強調している。

また、各茶芸教育機関でも、茶芸教育の内容としていけばなの項目を取り入れている。青島での茶芸習いコースでは、初期のコースからいけばなの項目があり、担当の先生は日本の華道を習った経験があり、その経験を生かして教えている。あるいは、いけばなの先生にお願いして教えてもらう。その花のいけ方は、剣山を使って日本華道の「盛花」という形が多い。つまり、中国では茶芸を習い内容は多様であるとわかった。現代中国人にとって華道と茶花の概念はまだ混乱していると言える。

現代茶席で花を取り入れることは、近年日本華道の流派である小原流、草月流などが中国へ広まっている現状と関係する。例えば、緑野仙踪茶道という茶芸教育学校では、中級コースではいけばなの講義2回を行う。さらに、茶と花を組み合わせるコースを設けている。2022年3月15日に WECHAT でインタビューしたD茶芸師は「私は花の稽古経験を生かして茶席の花を生けている、茶席も賑やかになった」と語った。

茶芸師は、茶席の要素には花を取り入れ、あるいは古代要素を取り入れることを考え、現代的な「美」を作り出すことを重視している。さらに美しい工芸品を組み合わせることで茶席を設計することもある。2019年4月13日

に WECHAT でインタビューした XJT 茶芸師は、「海外からきた要素であるから、珍しいものが多く、新鮮感がある」と考えている。その考え方によれば、中国で現代茶席を設計する際には、使われた道具の出自は厳密には問わず、人気を集めることができるかどうかが重視される。つまり、人々に目を楽しませることができるかどうか为重んじられているのである。

### (3) 総合的な各要素の組み合わせ

茶席は五感に直接に訴えるものであり、茶人の表現でもある。そのため、茶芸を演じるときに注目される要点がいくつかある。竜華は「茶席の設計は、生活芸術の一種の設計であり、視覚的には非常に重要な意味を有す」<sup>(35)</sup>と述べている。そして、茶席はその設計（目）、湯の沸く音（耳）、香道の融合（鼻）、茶葉の飲用（舌）、茶を淹れて飲む動作（身）などのそれぞれの点に注意が払われる。そのために、これらは茶芸師の試験審査内容に位置づけられている。2019年12月28日に香山小舎茶芸館でインタビューした LJ は「茶席は茶芸師の心を見せる部分である」と強調している。つまり、茶席において演じる舞台であるのみならず、茶を通じて淹れる側と飲む側両方が楽しむことが求められる。

近年、茶芸の発展とともに、茶席の鑑賞性をより向上させるために、他の芸術要素も組み入れ、芸術的な飲茶雰囲気設計される傾向がある。また、中国伝統芸術が採用されるようになった。例えば、古琴の席や焚香の席などである。包小慧は「茶席設計の設計目的は、スタティックな形にし、ダイナミックな形にし、鑑賞性を高めるのである」<sup>(36)</sup>と述べている。例えば、2020年の青島茶博会での嶗山茶の茶席は、古琴や香の席など中国の伝統的な要素を取り入れ、現代の手法で融合させて飲茶にふさわしい雰囲気醸し出した。さらに、茶人の衣装は当日の茶席のテーマを合わせていた。茶席（写真1）を設計した Z 先生（2020年4月に WECHAT でインタビューした）によると、「茶の養生を強調したため、嶗山茶と相応しい道教のイメージ衣装を選んだ（特別に注文した衣装である）」と述べている。2020年8月に WECHAT でインタビューした茶芸師 LJ（写真1中

(35) 竜華、李若愚 [2018: 48]。

(36) 包小慧 [2016: 242]、周新華主編。



写真1：青島茶博会上に設置された茶席

出所：2020年に WECHAT で LJ 茶芸師にインタビューした内容である。

央)は、「主に茶席では芸術性が意識され、品茶にとってよい雰囲気と高尚な鑑賞性を作り出した。全体的にそのテーマに沿って設計している」と語っている。

これまで述べてきたように、本稿では茶席設計の過程を通じて現代人の美意識の要素を考察してみた。まず、現代人にとっては「美」は国境にかかわらず、様々な各要素を取り入れていることが明らかになった。すなわち、茶席設計は道具の組み合わせを考えるよりも、受け入れやすい要素を優先的に考える。現代人の美意識は、自分の立場より、他人がどのように見ているのかを考え、他者がどのように見てくれるかを重視する。茶席は美しさというより斬新で個性的な茶席を設計することが期待される。いわば、現代の茶席における「美」は、設計をする人が美しいと感じることより、見る人が美しいと感じさせることを優先する。つまり人の目を引き付けることができるかどうか重要である。

### 三、茶席の「文化生産」

茶席に取り入れる要素を分析すると、現代茶席は「ブレンドの美」ともいえる。2021年6月17日に WECHAT でインタビューした茶芸先生たちは

「茶席は多様性が良いと考えている」と言う。そして、2019年12月28日に香山小舎茶芸館でインタビューした内容によると「美しいものと組み合わせたら、きっと人気のある茶席になると信じている」と語った。周佳灵は「茶席の設計目的は、雰囲気を作り出し、茶事に適切で快適な空間環境を提供する」<sup>(37)</sup>と主張する。要するに、現代茶席は飲茶の雰囲気を作るために創出されたものといえる。

前述のように、現代茶席の設置は、中国古文を参考しながら人気ドラマに登場する道具から構成するのが一般的である。古文、写し道具は「伝統」という符号があるからこそ、現代人に受け入れさせやすい要素である。それらの要素を組み合わせることで茶席を創造することは、「創られた伝統」ともいえる。2020年4月にWECHATでインタビューしたXJT茶芸師は「我々の組み合わせは古代茶席を復元している。多いの歴史要素を取り入れているし、その伝統的な雰囲気、歴史の深さをできるだけ出すように、習いに来る人々に伝えるように努力している。完全に歴史を再現できないが、精一杯作り出している」と解釈している。そして、伝統文化の符号、「外来」要素、総合的な各要素を取り入れることで茶席の鑑賞性が徐々に高まり、茶席を訪ねる人々も日常生活の感覚から離れることができる。

いわば、茶席は現代人にとって一つの心休まる場所であり、あるいは非日常を感じさせるように設計した装置ともいえる。池宗憲は「茶席の美学を通じて、現実的な生活の美しさを追求することができる」<sup>(38)</sup>と指摘した。現代茶席を通じ、現代人の美意識を観察することができる。現代人は茶席を通じて「美」に対する認識を向上させ、自身が憧れる幸福な生活を積極的に実践する。池宗憲は「茶席の味とは」と問われると、「茶席は、審美的な合理性を象徴し、エネルギーを与える。その中には新たな大きな可能性が隠れている」<sup>(39)</sup>と答えた。つまり、現代人は茶席設計を通じて「美」を追い求め、日常生活に必要なエネルギーを獲得するのである。

一方、中国人の美意識の中には、複数の美の要素をまとめれば美しいものとなるはずであるという考え方がある。茶席を設計する場合は、「ブレ

---

(37) 周佳灵 [2015: 285]。

(38) 池宗憲 [2010: 19]。

(39) 池宗憲 [2010: 19]。

ンド」することが多くなっている。つまり一回のみの茶席は、伝統文化の要素、現代的な要素、さらに海外の要素を取り入れるのが人々に受け入れられやすい「美」となると考えられている。また、現代茶席の設計方法は、まだ試行錯誤の途中であり、言い換えれば、今なお人の目を奪うという目的で茶席を設計し、人気がある要素を取り入れ、受け入れなかった要素を放棄するという過程を繰り返しながら実践している。つまり、現代茶席の設計は、茶芸師たちにより試行錯誤しているとも言える。

河野眞は「民俗文化が活用されることである、今日の生活一般の位相とは異質な文化として存在したり、機能したりしていることが多いのです」<sup>(40)</sup>と述べる。換言すれば、現代茶席の設計は、都市住民の日常生活に新鮮さを与え、あるいは歴史を感じさせる一時的な楽しみを作り上げることである。そのために、現代茶席は現代人の理想に合わせるように変化しつつある。

河野眞の次のような視点は、現代茶席を考える上で有益である。河野は、「民俗文化は、今日、さまざまな形で私たちの生活の中に組みこまれています。その様態はまことに多彩であります、その多くは、昔ながらの文化が今なおしぶとくいき続けていると言った観点から理解できないものなのです。今なおという見方をした途端、事態の本質が見えなくなってしまうといった現象が沢山あって、また、そこに現代社会の文化的な特色があ



写真2：2020年茶博会茶席——茶杓を飾っている。



写真3：茶席の飾り方

出所：2020年に WECHAT で LJ 茶芸師をインタビューした（写真2、3）。

(40) 河野眞 [2002: 49]。

るといってもよいぐらいです」<sup>(41)</sup>と指摘している。

ところで、近年における茶芸師教育機関の上級コースでは、今まで使われなかった道具が使われるようになった事例もある。例えば、日本茶道具の棚（写真3）が、現代あまり使われない茶道具にもかかわらず、近年では大イベントで使えるようになった。さらに、茶芸師教育機関では道具の並べ方まで教授される。その上、さまざまな作法は細かくまで決められており、道具の置く位置や向きなどが細かく教えられている。それについて、2020年4月にWECHATでインタビューしたXJT茶芸師は、「茶席設計を習ってから、だんだん整理術が身についた」と語る。

2020年4月6日にWECHATでインタビューしたZ先生は「それは陸羽の『茶経』にある道具とよく似ている、日本から流出したものを使った」と述べ、また2020年4月にWECHATでインタビューしたLJ茶芸師は「中国は長い飲茶文化の歴史を誇っているが、古い茶道具は日本の方が多く保存しているため、現在では日本のものをよく買う。そして、日本からきた茶道具を使うのが、その時代の飲茶様式が復元できるため」と語った。茶芸師たちは、中国飲茶文化の悠久歴史を強調するために積極的に様々な古代要素を取り入れ、実践している。



写真4：野外茶席（博士課程内容）

出所：緑野仙踪茶道のZ先生撮影（2020年）

(41) 河野眞 [2002: 52-53]。

茶葉の淹れ方であろうと、茶席設計であろうと、現代茶席は「創造」され、「生産」されたものであることが明白になった。それは現代中国人の生活が豊かになった一つの証拠であるともいえる。現代人が物質的な生活から解放され、文化的な生活を求める余裕ができた。茶席のような事物が生産され、教える内容までになることは、習う側にしろ、教える側にしろ、現代中国人の日々の営みが美を追求する余裕ができたことを示している。

現在茶席の設計はまだ発展途上の段階であるが、茶芸の伝来以来、儀式化され、「美」を意識して発展してきた。例えば、YYL が10年前に撮った茶席の写真と現在の茶席と比較すると、この10年間で驚くほど発展した。この間様々な要素が取り入れられ、中国伝統文化や外来要素が多く取り入れ、テーブルは一つから三つ(写真1)になり、「飲」茶から「品」茶となった。

さらに、花、絵、琴などの要素を取り入れ、五感まで鑑賞できる要素が加味された。そして、茶を淹れることに留まらず、座り方や入席の歩き方など茶をいただく客の動作まで細かく決められ、主客双方ともに礼儀正しくすることが求められるようになった。つまり総合的な文化が創造されてきたとも言える。

茶席は茶を出す側といただく側双方の要素を融合させた産物ともいえる。つまり、茶席を茶の要素のみで構成したら、若い世代の人々はあまり興味をもたないだろう。古琴、香も同様であり、その各要素を統合し、現代人が新たな認識を生み出せるように新たな茶席を発展させてきた。文化生産理論のように、「野人にカウボーイの服装をさせて、歌を歌ったら、20世紀3、40年代カントリーミュージックのモデルになった」<sup>(42)</sup>、「各面での変化は比較的簡単であったが、それらが結合することによりハーモニーの発展を促進し、その後のポップの多様な発展をみせるようになる」<sup>(43)</sup>のである。Richard A. Peterson の文化生産理論は現代茶席にも通底している。河野眞はそれを「異化作用」とまとめ、「生活文化のなかに落差を作り出すことです。レヴェルの違ったものを配置することによって、平面を起伏

---

(42) Richard A. Peterson [1997: 106-107]、転載盧文超 [2015: 237]。

(43) Richard A. Peterson, N. Anand [2004: 314]。



に変えるのです<sup>(44)</sup>と述べている。河野眞が指摘したのは現代茶席が人気になる理由である。

#### 四、おわりに

本稿では、現代茶席を事例に現代中国における「美」の構築について考察した。現代中国の「美」の構築は中国的な独自の「美」を作り出すことではなく、現代茶席の事例から考えると、中国茶文化、中国の美の由来、中国茶文化の魅力の所在など、茶芸に関わる人々の需要に基づいて構築されているのである。

一方、その過程により現代人が多様な「美」を追求する様子もうかがえる。新たな茶文化の発展とともに、茶席が生まれ、茶の伝統的なシンボルを利用し、現代生活にふさわしい要素を取り入れ、それを改めて組み合わせ再生産されてきた。茶は新たな「顔」を呈し、現代人に受け入れやすい形での再構築が実現した。茶席の生産と再生産の過程では、継承とプロセスの分裂を経験し、現代的なアイデアとデザインの統合を介して、現代社会に融合し、現代生活と統合する。現代茶席の構成要素から、現代人が求めている「美」は多様であり、異質の特徴が見えると考えられる。

#### 参考文献

(日本語文献)

河野眞 (2002) 「現代社会と民俗学」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』(8) 43～53頁

宍戸佳織 (2006) 「中国茶文化と茶館——杭州浙江省杭州市の事例」早稲田大学博士学位論文

劉偉 (2022) 「青島における茶芸教育の導入と受容」愛知大学国際中国学研究中心編『ICCS 現代中国学ジャーナル』15(1) 34～47頁

(中国語文献)

包小慧 (2016) 「“茶席呈現時的声画配置”」周新華主編『茶席設計』杭州：浙江大学出版社

---

(44) 河野眞 [2002: 53]。

- 池宗憲 (2010) 『茶席——曼荼羅』生活・新知三聯書店
- 蔡榮章 (2011) 『茶席・茶會』安徽教育出版社
- 陳宗懋主編 (2015) 『中國茶葉大辭典』北京：中國輕工業出版社
- 黃韓丹 (2016) 「茶席中的茶品及茶具」周新華主編『茶席設計』杭州：浙江大學出版社
- 盧文趙 (2015) 「理查德・彼得森的文化生產視點研究」『社會』35(1) 229~242 頁
- 羅鋼、王中忱主編 (2003) 『消費文化讀本』北京：中國社會科學出版社
- 童華、李若愚 (2018) 「視覺思惟在茶席設計中的運用」『文化創新比較研究』第 7 期 48 頁
- [美] 理查德・A. 彼得森 (著) 盧文趙 (譯) (2017) 『創造鄉村音樂——本真性之製造』諷林出版社
- 靜清和 (2015) 『茶席窺美——茶席設計と茶道美学』九州出版社
- 潘城 (2016) 「“茶席的視覺藝術傳達”」周新華主編『茶席設計』杭州：浙江大學出版社
- 潘城 (2018) 『茶席藝術』中國農業出版社
- 喬木森 (2005) 『茶席設計』上海：上海文化出版社
- 沈學政 (2016) 「“茶席的概念界定”」周新華主編『茶席設計』杭州：浙江大學出版社
- 童啓慶 (2002) 『影像中國茶道』浙江攝影出版社
- 王興虎 (2017) 「茶席設置中茶具的選配」『藝術生活——福州大學廈門工藝美術』43~45 頁
- 王國安 (2000) 『茶與中國文化』格致出版社
- 溫曉菊 (2016) 「“茶席的茶水和茶食”」周新華主編『茶席設計』杭州：浙江大學出版社
- 徐贛麗 (2021) 「叢鄉村到城市：中國民俗學的研究轉向」『民俗研究』第 4 期總第 158 期 12~27 頁
- 陽佳統 (2019) 「彼得森文化生產視角理論與發展」西南大學修士學位論文
- 楊瑞榮 (2014) 「章志峰：宋代茶百戲挖掘者」『今日中國 (中文版)』88~89 頁
- 周新華主編 (2016) 『茶席設計』杭州：浙江大學出版社
- 周文棠 (2003) 『茶道』浙江大學出版社
- 周佳靈 (2015) 「茶席設計意境營造」『藝術教育』285~286 頁
- 周星 (2014) 「漢服運動とは何か——中國におけるインターネット時代のサブ

- カルチャー』『中国社会の基層変化と日中関係の変容』愛知大学国際中国学  
研究センター（編）105～123頁 日本評論社
- 鄭斌（2019）「茶席設計及其空間美学表達」『設計理論』第34卷総第189期15～  
17頁
- 張来陽（2018）「浅析茶文化中的茶席設計」『農村經濟与科技』第29卷第20期（総  
第448期）225～226頁

（英文文献）

- Peterson, Richard A. (1976) The Production of Culture: A Prolegomenon. *American Behavioral Scientist*, Vol. 19 No. 6, July / August 669–684.
- Peterson, Richard A., Anand, N. (2004) The Production of Culture Perspective [J]. *Annual Review of Sociology*, 30(1): 311–334.

中文摘要

混拼之“美”  
——现代中国茶席设计——

刘 伟

茶席作为当代茶艺的可视展示形式，被运用到各大茶博会、茶会的展示中。本文拟以通过在青岛各大茶艺培训学校及茶博会和茶会现场所展示的茶席设计，来考察现代茶席“美”的生成路径与创造过程。研究表明现代茶席的构成，是当代茶艺师们为了迎合现代人的审美“口味”，经过一系列的拼接、组合起来的“美”。同时从茶席的构成元素可以得出现代人追求的“美”具有多样性、异质性的特点。